

短歌と金 佐佐木定綱

政治と金は切っても切れないが、短歌と金はくつつけてもくつつかない。短歌で一発当ててやろうと思つて短歌をやっている人はいないだろうし（いるならばその時間を株の勉強にでも充てた方がいい）、記憶を確認しないと賄賂をもらつたことを思い出せないという人もいないだろう。

若い男の興味は金と女であり、ぼくの友人もその例に漏れない。先日あつたときの会話だが、「短歌つてどれくらいもらえんの？」「短歌やつても金はもらえないよ」「え、じゃあなんでやつたんの？」ときた。思わず答えに窮してしまつたが、そんなものだろう。金銭の価値観から見ると、短歌をやることの意義すら危うい。

近頃原稿でお金をもらえることが増えてきた。金額の多寡で質を変えたりなどは当然ないのだが、初めてのことでもあるし、一首の値段というのは気になる。もしぼくが人身売買でもされるとしたら値段は気になるだろう。だいたいニューアンスで伝えるが、一首、某チェーン店のコーヒー一杯だったり、日本酒一本分ぐらいただつたり。一首の値段というのはそういうものらしい。

資本主義とは貨幣というルールを基準にした一種のファンタジーである。養老孟司が言っていたが、基本的にそのルールの枠外にいる短歌だからこそ、外から中から、自由に歌い上げることがで

きるのではないか。常にファンタジーの中にいる住人がその世界を把握するのは難しい。

・双眼鏡で三百円分見る景色 生きることまたいつか死ぬこと

ユキノ進（歌壇二月号「サンバを踊る三羽の鳥」）

歌壇賞候補作品から一首。資本主義が浸透した現代では、景色ですら商品である。生きることと死ぬこともまた金銭で区切られているのである。下の句で大きく觀念を出してしまい、もつたいないように思う。作者は角川短歌賞でも候補になつており、仕事の歌が目を引く。

・百円のコスメどつさり買ひ込みて師走の原宿通りを歩む

栗木京子（短歌二月号「金ゴマの花」）

さらつと歌い上げ、明るさのある歌である。百円ショップだろうか、師走に、それもただでさえ混雑している原宿を闊歩している。金銭を歌い込んだことで作者の生活や、世相もうかがい知ることが出来る。

・かえらじと数ぞとどむる「DR10322TW」

大野道夫「秋意」

ずいぶんと変化球だが、こういう詠み方もある。「DR10322TW」はお札の整理番号。よく見ればお札の一枚一枚に違う番号が記載されている。普通の人ならばまず気にしないだろう。お金をたたの物質としてとらえている。

お金はデジタルだ。あるかないか、1か0かしかない。だが、短歌は（短歌のみならずあらゆる文芸は）その1と0の間を自在に表現できる。短歌の価値観から見ると、お金は価値のあるものかどうか、果たして。